

---

# 異形な異刑

ワラビもち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異形な異刑

### 【Nコード】

N9861Y

### 【作者名】

ワラビもち

### 【あらすじ】

これはまだ僕が異形の彼女に会ってから一年しか経っていないときに起きた出来事。

全てを歪めてしまう彼女と過ごした一週間の出来事。

僕らにとって年齢なんてあるようでないものだが、アレは実に子供っぽかった気がする。

でも、それでもあの出来事は僕の頭から消えてしまうことは無いように思うんだ。

## まえおき

「親愛なる黒川 真君。僕は愛すべき友人として君に質問をしたいと思うんだけどいいかな？」

そう言つて白鳥 要は目の前の光景から目を離し、こちらを向いてにこやかに聞いてきた。

「君の目にはこの光景がどう映っているのかな？」

「どつて……」

僕はその言葉に少しだけ戸惑つた。

目の前に広がる光景、それはまさに見るも無残なものと表現する以外にはなんともいえないものだった。

敢えて言うなら、凄惨であると言い換えることは出来たかも知れない。

首にはまっすぐに斬り傷。

的確ではなくとも乱暴に血管が斬られていてそこから赤い液体が溢れていた。

体のあちこちにも傷があり、何度も何度も突かれた痕があった。

「人が、死んでるようにしか見えないけど……」

「死んでいる……そうだね。人が一人死んでいるね」

寝ているのかとも思ったよ――

要の口からその言葉が漏れたのを僕は聞き流さなかった。

この状態でただのドッキリなわけが無い。

あの時は分からなかったが、彼女は本気でその時目の前に横たわる物体が死体なのか寝ているのか区別ができていなかった。

死と睡眠の区別はついていても、そうなのかそうでないのかの区別が曖昧だったのだ。

この確かめるような口調も、自らの視覚情報に間違いが無いかの確認作業。

「いや、この状態だともう死んでるよ。血が乾いて黒くなってるし、

もう顔色も白い」

「そうなのか、これは勉強になったよ。真君といると本当にためになるなあ」

要はそう言いながら顎に手を当てて言う。

「なら死因は首と胴体からの出血死。と見ていいのかな？」

「多分ね。普通に見たらそうだけど、もしかしたら斬られたときのシヨック死って可能性もあるんじゃないかな。僕は専門家じゃないから分からないけど」

「専門家じゃなくてもそこまで分かれば十分すごいと私は思うよ。

中学2年にしてもう人間が完成しているじゃないか」

「そんなんじゃないよ。ただ普通に考えれば思いつくだけの可能性の話をしただけだよ。誰にでも出来る」

僕が人間として完成している？

とんでもない。

僕は人間として終わってるんだよ。

最初からこんなんさ。

何も変わってない。

成長してない。

「ただ、当たり前前のことをしてるだけ」

「ふふふ。やっぱり君もそうなんだね」

ちよつとだけ暗い顔をしていた僕に要はうれしそうに目を細める。

「やっぱり君は素敵な異形だよ」

「え？」

僕は聞き返したが要は答えずに話を戻した。

「ふむ、まあ僕の目の前の光景が正しく起こっていることなら多分君の言うとおりの結果に落ち着くんだろうね。普通なら」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9861y/>

---

異形な異刑

2011年11月29日20時45分発行